

奈良・定林寺北方遺跡

じょうりんじほっぽう

1 所在地 奈良県高市郡明日香村大字立部

2 調査期間 一九九三年(平5)六月～七月

3 発掘機関 明日香村教育委員会

4 調査担当者 納谷守幸

5 遺跡の種類 自然流路

6 遺跡の年代 五世紀～一四世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

定林寺は七世紀前半に造営が始まった飛鳥時代の寺院の一つである。丘陵上部に寺域を設ける点で、飛鳥地域の古代寺院では、檜隈寺などと類似する。

調査地は定林寺が所在する丘陵の裾をめぐる谷筋の水田で標高一〇〇m、定林寺跡境内より二〇m程低い。

橘寺の南に位置する仏頭山背後に源を発し、定林寺跡丘陵裾から天武陵の南を通り、欽明陵の南西で高取川



(吉野山)

に合流する流路が調査区の南側を流れている。

調査の結果、この流路の前身と考えられる旧流路を数条検出した。遺物は瓦・土器類が整理用コンテナ二〇箱ほど出土し、軒瓦は定林寺所用の単弁十一弁軒丸瓦五点、川原寺式軒丸瓦二点、藤原宮式軒平瓦六六四二C二点がある。木簡はこの流路の最下層の粘土層から二点出土している。

8 木簡の积文・内容

(1) ・智 道□□道道□

□□

(330)×(30)×5 081

「智」や「道」の字を習書したもの。上下両端及び左右両辺とも欠損していて、原形は不明である。

なお、他の一点は〇三二型式(長さ一三二mm幅四五mm厚さ四mm)であるが、表面が削り取られていて、わずかに下端に墨痕を残すのみである。

(1～7
8 納谷守幸
橋本義則)